

「深淵」参考資料一覧 第135回 福永武彦研究会 2012.7.22 配布資料に追記

* 要旨は資料作成者の主観によるものであり、執筆者の意図と一致しているかどうかは不明です。

1. 福永自身による言及など

No.	タイトル	著者	書名 出版社)	初出年/月	ページ数	要旨
0	「深淵」初出と書誌	—	福永武彦全集 第3巻 附録他より (新潮社)	—	1	初出：「文藝」昭和29年（1954）12月号 単行 1. 「冥府 深淵」初版。昭和31（1956）年3月大日本雄弁会講談社刊。「ミリオン・ブックス」の一卷。新書判、紙装。装丁 駒井哲郎、解説 寺田透。 2 「夜の三部作」初版。昭和44年（1969）12月講談社刊。四六判、布装、函入。装丁 著者、序文 著者。 3. 「夜の三部作」限定版。昭和45年（1970）8月講談社刊。A5変型、総皮装、布装帙入。限定500部、番号入。全冊著者署名。内容は2に同じ。
1	「夜の時間」初版附記	福永武彦	「夜の時間」初版 福永武彦全集（新潮社）第3巻 附録に所収	1955/06	1 (全集)	この作品は、昨年度に僕の書いた「冥府」及び「深淵」と共に、「夜の三部作」と呼ばれるべき中篇のシリーズを形成するものである。それぞれに独立した物語だが、たゞいづれも暗黒意識を主題にして、それを三つの違った面から取り扱っている点にのみ、共通点がある筈だ。
2	「夜の三部作」初版序文	福永武彦	「夜の三部作」初版 福永武彦全集（新潮社）第3巻 附録に所収	1969/10	3 (全集)	「深淵」は私の保存していた一枚の古い新聞紙の切抜から想を得たものだが、「冥府」の主題の延長線上に位し、やはり幻覚的な作品である。私はローレアモンを愛読したことがあり、それがこの小説の中に少しばかり影を落しているかもしれない。しかし「冥府」の時と違って批評家は誰もローレアモンの影響だなどとは言わなかった。
3	福永武彦全小説 第3巻 序	福永武彦	福永武彦全小説 第3巻 福永武彦全集（新潮社）第3巻に所収	1973/11	3 全集)	療養所にいた頃に私が最も熱心に勉強したのは精神病理学である。(略)私はミンコフスキの「精神分裂病」とか村上仁の「精神分裂病の心理」などという本を丁寧に読み、分らないところがあれば岡田さんに質問したりした。(略) 「夜の三部作」については、その都度単行本の後記で説明したから付録を参照してほしいが、これらも精神病理学に基づいた作品ということが出来ようか。療養所を出た年に、暮までかかって「草の花」を書き終えると、翌昭和二十九年の一月から二月にかけて「冥府」の前半を書いた。「草の花」が主人公に作者自身のしっぽをつけていたのに対して、ここでは主人公から独立し、謂わば主人公の住む世界の雰囲気や作者の心的状態を抽象的な模様として写し取っているような構図を取った。五月に「冥府」後半、八月から九月にかけて「深淵」、翌昭和三十年の三月から六月にかけて「夜の時間」を書いたが、登場人物たちは次第に作者の精神の或る部分の拡大した図形を描くに至ったように見える。それは私が療養所にいた間に「物を思」ったその「物」が、絶望的に暗かったせいであろう。(引用)
4	「深淵」エピグラフ	福永武彦	ロマ書 5の 12			人皆罪を犯したるが故に死総ての上に及べるなり。 注) ロマ書は、『新約聖書』中の一書で、使徒パウロ本人によって書かれたものであるとみなされている七つの手紙の一つである。本書の中心テーマはイエス・キリストへの信仰を通して得られる救いである。パウロはアブラハムを引き合いに出してキリストによる神の恩寵を強調し、人が義（正しい）と決定させられるのは、信者の側の信仰と結び付いた、神の側のこの恩寵のみによることを力説している。また、ユダヤ人にも異邦人にも、誇ったり自分を他の人よりも高めたりする理由は何もないことに注目させている。(Wikipediaより)

No.	タイトル	著者	書名 出版社)	初出年/月	ページ数	要旨
5	ロオトレアモン「マルドロオルの歌」	福永武彦	創元社版「現代詩講座 別巻 海外の詩」 福永武彦全集（新潮社）第18巻所収	1950/11	15 (全集)	<p>主人公であるマルドロオルは作者ロオトレアモンの分身であるが、何よりも絶望からの逃走者として定義づけられる。</p> <p>マルドロオルが悪をなすのは、「彼が悪人に生れついたのを知った」ためばかりではない。それは同じく悪をなす「神」に対する彼の復讐にもとづいている。</p> <p>マルドロオルは善を知らないわけではない。しかし生きるために本能的に悪を求める以上、行為は常に善悪の彼岸にある。ただ彼が自分の悪業を省みる時に、その言葉は苦い。「悲しい哉、善と悪とは何の謂だろう。それは同じものではないのだろうか、同じである故に己達が激昂して己達の無能力をつい説明してしまうような。また同じである故に、どんなばかげた方法を使っても無限にまで届こうとする人間の情熱とやらを、つい証明してしまうような。それとも善悪とは、二つの全く別のものなのか。そうだ、それは寧ろ一つの同じものであってほしい……。」このような言葉の中には、ドストエフスキが『悪霊』の中で、スタヴロオギンの「告白」に述べた思想と極めて似つかわしいものが感じられる。</p> <p>マルドロオルは誰をも愛しないという。「己は女を愛しない、エルマフロジット（男女両性者）だって同じことだ。必要なのは、ただ己に似ている奴だ、」と彼は叫ぶ。たしかに少年達に対する彼の愛は、それが束の間だけ続いたとしても直に憎悪に変質する、少女は……、マルドロオルは一般に女性に対して深い蔑視をしか持っていない。（引用）</p>
6	病者の心	福永武彦	「保険同人」1952年7月号 随筆集「別れの歌」（1969）所収	1952/05	9	<p>心が絶望に塗りつぶされ、嘗て生きたように自分はもう二度と生きられないだろうと考える時に、忽然と、死は彼の胎内にある。（略）一度精神の死を魂に刻み込まれた者には、真の人間としての回復はたやすくはない。死の傷痕は、以後、彼の一切の思考を支配するだろう。（略）死はその場合、病者の一切の思考と行動とに影を下す暗黒の意識である。</p> <p>（病者の孤独の段階） 第一段階：初めて療養所に入った病者の多くが、一種の神経衰弱症にかかるが、その時期においては、彼の内部の死あるいは死の強迫観念が、精神の内的風景として、彼の意識の上に絶えず写真のように焼きつけられている。この時期において、病者は意志的である。 第二段階：結核の症状が多少とも回復し、希望が明かに芽生えてもいい時に、かえって言いようのない孤独が病者を押しつぶすことがある。このような状態、それは一つの精神の死である。その中からは何もかも生れない。そこには意志がない。病者は肉体よりも精神に於て病んでいる。 第三段階：自己の内部に、常に明かに傷痕を直視して生きることである。たとえ彼の肉体が回復しても、彼の内部には死が共存していることを知る。彼は死と共に生きている。彼は、彼の失ったものが肉体の健康であり、彼の得なければならないものが精神の健康であることを、はっきりと知るだろう。孤独はその時、英雄の孤独であって弱者のそれではないだろう。（要約）</p>
7	「死の島」と福永文学	福永武彦 篠田一士	「新刊ニュース」228号 福永武彦対談集「小説の愉しみ」（1981）所収	1971/10	12 (再録時)	<p>福永 好きだからなるべく純粋小説を書きたい。小説以外のよけいな要素を取り除いて、それだけで自立している想像力の世界といったものをね。『死の島』も最初は純粋小説的な発想だったんだけど、長い間考えているうちにそれだけでは不足になってきた。人物の点でも、ほくの小説は、たいていは芸術家の人物が出てくるんだけど、今度は主人公を、ごく若い小説家志望の、まだでき上がってない男にした。それから、女主人公の一人は絵かきだから、その点はほく好みだが、もう一人はごく当り前の女だし、それにもう一人、名前のない“ある男”というのが出てくる。たとえば『深淵』に出てくる脱獄囚、あれと似たようなもので、ほくの中にあるきれいごとじゃないほうの人物だ。</p>
8	ボードレールの十四行詩「深淵ヨリ叫ビヌ」より	ボードレール	詩集「悪の華」所収 訳は「象牙集」（福永武彦全集第13巻）より。	1979	1	<p>愛するただ一人の「者」よ、この心の沈みはてた、暗い深淵の底から、ただ汝の憐みを願ふ。 そこは鈍色の地平のめぐる暗愁の世界、夜の中を恐怖と冒瀆とはうごめきあふ。 (冒頭部引用)</p>

2 単行本

No.	タイトル	著者	書名 出版社)	初出年/月	ページ数	要旨
1	『夜の三部作』	首藤基澄	福永武彦の世界 (審美社) 第4章	1974/05	17 第4章	<p>福永の「病者の心」の分類によると、この『深淵』の世界は第一の段階に相当している。第一段階の病者は、求める意志は持っているが、「彼は常に一人きりだ。何も共感し合わず、響きはただ彼の内部でだけこだまする。— このような状態、これもまた一つの深淵ではないだろうか。」(「病者の心」というような孤独にのめりこんでいるという。</p> <p>他人と交感不能の死の強迫観念にとらわれた病者は、深く己れの実存にかかわっているわけだが、福永もそうした他と響きあわない内面を保有し、危機的状況を生きてことによって、「深淵」という単独者の思想を形成して行ったのである。</p> <p>「何ものにも共感」せず、「己は己だ」と考え、行動する単独者の存在は、いうまでもなく(現実に骨がらみになり、身動きのとれなくなったわれわれへの批判でありえている。しかし、われわれはそうした単独者が豊かな愛を育てることが出来なかったということも忘れてはならない。彼が己れに固執したために、いかに貴重なものが失われていったか。深淵に生きる単独者もつまるところは両刃の剣であるほかない。</p> <p>福永は「病者の心」の三段階をそれぞれに分離して表現している。『深淵』『冥府』『草の花』と並べれば、われわれは「病者の心」の状態をそれぞれの段階に応じて把握出来るわけだが、善意、悪意という観点に立てば、『深淵』『冥府』が悪意の文学であり、そこでは下降する人間の暗い情念に照明があてられている。(引用)</p>

3. 文芸関連雑誌

No.	タイトル	著者	資料	初出年/月	ページ数	要旨
1	福永武彦における<暗黒意識>	清水徹	国文学 17巻14号 1972年11月号 特集 福永武彦	1972/11	8	<p>内部に孕まれた<死>、孤独・挫折・絶望の源泉、錯乱・狂気の心的な場の三者を福永は<暗黒意識>の名の下に統一的に把握する。類同物をたどるようにて<暗黒意識>の範囲をひろげてゆくことによって、かれは、生を生きるときの心的状態をいわば逆光の下に浮かび上げさせるような装置を手に入れるのである。言いかえれば、かれは、<暗黒意識>を裏箔とする鏡を磨き上げ、これに生の姿を映しだすことによって小説を創造してゆくのだ。</p> <p><暗黒意識>の観念の定立は、福永武彦の恒常的テーマ(愛と孤独)を内面化された<死>の深みへと根づかせ、生の根源にかかわる作中人物たちの姿を浮かび上げさせるのに大いにあずかって力あるのである。(引用)</p>
2	福永武彦の魅力	加賀乙彦	解釈と鑑賞 47巻10号 1982年9月号 特集 福永武彦	1982/09	4	<p>福永武彦の小説では死は恐怖としてよりも悲しみとして現われている。どの小説にも、死への諦念とそのような死を含む生の悲しみが充ちていて、まるで悲しみの文学とでも言うべき世界が表現されているのが注目されるが、それを典型的に示したのが『夜の三部作』だろう。</p> <p>『深淵』はカトリック信者の女と荒々しい賭夫との関係を、ふたりの意識を交互に現わすことで書き切った秀作で、このような野生の造型が出来る作家が、どうして甘いなどという評価で一括できようかと反省させられた。(引用)</p>
3	福永武彦とキリスト教 『独身者』を軸として	佐藤泰正	解釈と鑑賞 47巻10号 1982年9月号 特集 福永武彦	1982/09	7	<p>『深淵』では、<信>の世界に生きようとする女と<肉>の世界を生きんとする男の独白を交互に展開しつつ、<存在>の底にひそむ<深淵>とは何かと問う。作者は女の抱く<信>の世界に対して、この<存在>の孕む<深淵>を対峙させつつ、<信>なるものの存在論的な根拠を問いつめんとするようである。</p> <p>福永がその宗教的テーマに最も近づいたものが『夜の三部作』と言われるが、たしかに『深淵』のエピグラフ— <人皆罪を犯したるが故に死総ての上に及べるなり>という詞句の示すところは三部作のみならず、『独身者』より『死の鳥』に至る多くの作品を覆うものであろう。同時に病床体験を通し「現実を死者の眼から見ることを覚えた」(『冥府』初版ノト)という福永が、よく死者ならぬ「生者」の時間を、その倫理を問いつづけた根底には、病者のニヒリズムを超えしめる何ものかがあったはずである。この時、福永がその長い「物を思う時間」の中で、彼が繰り返し読んだ聖書の箇所が『ヨブ記』と「ゲッセマネの祈り」部分であったという証言は極めて意味深いものがあろう。(引用)</p>
4	夜の三部作	栗坪良樹	解釈と鑑賞 47巻10号 1982年9月号 特集 福永武彦	1982/09	8	<p>『夜の三部作』の作品群が、いずれも福永の療養生活の所産だということが背景にある。従って、『深淵』の<わたし>の<死ぬこと>の不安>、その<骨を噛むような不安>は、通常のリアリズム表現の次元からいって、極めて切実・切迫したものがあ、当然それは<己>の<飢>と拮抗してはならないのであるが、それがそうっていない。<不安>という観念上のリアリティに比べて、<飢>という実際上のリアリティが、ここではまったく稀薄たらざるを得ない始末なのである。<不安>のリフレインによって、筆者自身の面影がますます強められてゆくことになるのである。(引用)</p>

4. 新聞、文庫/全集 解説他

No.	タイトル	著者	資料	初出年/月	ページ数	要旨
1	文芸時評 小説の悲劇・喜劇 ユウモアと悲壮調について	武田奉淳	中部日本新聞 1954年11月26日 『文芸時評体系 昭和篇Ⅱ 第9巻 昭和29年』による	1954/11/26	1	ひょっとすると療養所に発生したエログロ事件になるところを、作者の詩情と哲学で切り抜けている。「神」とおなじ、これも信仰と罪を追求しているが、やや古めかしい感じがする。死や肉欲の問題に関し、福永が小島より浅いわけではない。喜劇ぎらいの人に喜劇を探せとムリにすすめたくはない。ただ福永のほうがどうも平板で弾力が少ないのは悲壮調にあまりたよりすぎているからではないか。(引用)
2	私の文芸時評 人とけだもの	清水一	読売新聞 1954年11月9日 『文芸時評体系 昭和篇Ⅱ 第9巻 昭和29年』による	1954/11/09	1	この小説の主人公も人間的な陰影がかき消されて「けだもの」とはちよつとちがいが何か「野獣」のような感じで描かれている。人間の中でいえば、いつも絶望している類の人間である。しかし、この型の男は戦後の小説にしばしば現われてなれてしまったせいか、それとも人間的な面を消しすぎたために非人間的な面が浮き上がって来ないためか、ともかく男の獣性が読後感として残らない。かえって、その男によって発情させられたカトリックの娘の方がなまなましい印象となって残る。(引用)
3	文芸時評 シリフぼまりの低調 12月の雑誌から	平田次三郎	信濃毎日新聞 1954年12月1日 『文芸時評体系 昭和篇Ⅱ 第9巻 昭和29年』による	1954/12/01	1	安部の「奴隷狩り」と福永の「深淵」は、共に彼ら自身の現実に対する一つの観念を形作ってはいるが、人間に似ている従順な動物のウエーをめぐるファンタスティックな現代寓話である「奴隷狩り」も、聖女と飢えた野生の男とを配して、人間の生の深淵を描こうとした「深淵」も、実のところは、今日のわれわれの現実とうまく歯車がかみ合わないで、少し遠く離れているのである。作者のひとりよがりといってもよいのである。
4	文芸時評 みんな力作	平野謙	図書新聞 1954年12月4日 『文芸時評体系 昭和篇Ⅱ 第9巻 昭和29年』による	1954/12/04	1	150枚の枚数をつかったわりには、墮ちてゆく罪のおそろしさはふくらんでいない。たいへん深刻な題材にもかかわらず、そのおそろしさには、カクカソーヨーの感がつきまとう。 人間性そのものの深淵をうかべるのに、その方法上の意識が邪魔しているように思った。あるいは、もう一歩踏みこめない甘さを、方法上の試みでカヴァーしている、というべきか。(引用)
5	「冥府」・「深淵」解説	寺田透	「冥府・深淵」初版の解説文 1956年3月大日本雄弁会講談社刊 「ミリオン・ボックス」の一巻 日本文学研究資料叢書「大岡昇平 福永武彦」(1978)所収	1956/03	2 再録時	「深淵」の女性の言葉 私は、一体私の犯した罪とは何だろうかと考えました。私のように、私自身の意志のないところでそれを犯した者も、それはやはり大罪に数えられるのでしょうか。罪を犯したのは私でなく彼なのです。それなのになぜ、罪の傷痕は私にばかり深いのでしょうか。」これは泡鳴の刹那主義と、ドストエフスキーの人神の思想と、愛欲の罪悪性に関する漱石の思想の異様な混合を示す夜の時間の主要テーマとなっている。 と云えばすでに察せられるだろう、「深淵」の「己」が、著者の思想の他の一項であることが、「己」は、インテリになれば「夜の時間」の奥村次郎に等しい、「独存自我の生命の刹那的燃焼」泡鳴)の具体化である。 そして「深淵」の「己」の生き方の対偶は、あの「冥府」を形作る。死が直ちに新しい生への門出であるような生とはどんなものでなければならぬか。そうでないような生は、生きながら冥府にあることではないか。— と言え、この問いが直ちに「夜の時間」の奥村「哲学」に連ることが分るだろう。 著者はこの三作を「暗黒意識を主題にした三部作」と呼ぶのだが、僕にしてみれば、それはより適切に人間の意志や感情ばかりでなく、思考や行為まで支配するその内部の意識されざりしもの、それを己に即し、また作中人物に即して造形しようとした三部作と改称されるべきものだという風に思われる。(引用)
6	『夜の三部作』について	長田弘	「夜の三部作」講談社文庫(19719月初版)解説「福永武彦の文学」より	1971/08	10	福永が書く「人間を内面から動かしている眼に見えない悪意のようなもの」(『夜の三部作』序文)とは、それを逆転していえば、みずからなしたのではない行為においてさえ、人はどのようにも無垢でも無実でもありえない有罪性の意識としてひとりの人間の上にはたらくものの謂であるであろう。 『深淵』の「わたしの」罪を犯したのはわたしでなく彼なのです。それなのに、なぜ罪の傷痕はわたしにばかり深いのでしょうか」という問いかけのうちに、福永武彦をその深みからつかんでいる、みずからなしたのではない行為においてさえひとりの人間の上にも無垢でも無実でもありえない有罪性の意識のモチーフは、すでに明瞭すぎるほど明瞭であろう。(引用)
7	福永芸術の冥府 — 作家の表象 —	奥野健男	サンケイ新聞 1975年12月15日号 日本文学研究資料叢書「大岡昇平 福永武彦」(1978)所収	1975/12/15	2 再録時	「冥府」「深淵」「夜の時間」の「夜の三部作」は屋のにぎやかな世界に背を向けた深夜ひとり目ざめ、屋間の光では見えない深い影やひたを極限まで追いつめた狂気や死に向かうネガの世界である。ここには屋の世界を崩壊させる密室の悪意が人類の太古からの呪詛が宿っている。(引用)

5. 大学研究紀要、その他研究録

No.	タイトル	著者	資料	初出年/月	ページ数	要旨
1	福永武彦の暗黒意識について —「冥府」「深淵」を中心に—	首藤基澄	国語国文研究と教育 第1巻	1973/01	5	福永武彦の世界（審美社'74第4章「夜の三部作」の記述部分と同じ →資料2-1参照
2	「深淵」における<見る>と いうこと	鳥居真知子	福永武彦研究 第4号	1999/03/03	16	本論は、福永が「暗黒意識」を<幻覚化>したと述べている『深淵』について、「死の強迫観念」と「願望としての生への燃焼」との二面性を、どのような方法で表出していったかを、その内容を通して考察している。さらにロオトリアモンの創作方法との関連について考察している。 「深淵」の中で<男>は、目の前で祈る<女>を「見詰め」ながら、それと同時に<飢>が巢食う己の心の内部を過去に遡りながら「見詰め」る。<男>の独白は、各章すべてこの二つの<見る>ということから構成されている。 <男>は自分の内部を<見る>ことにより、<飢>に捉えられてきた自己を認識し、そこからの脱出を賭けて、「目の前」の<女>を<見る>。しかし<男>は、外界の<女>を<見る>ことを通して、<飢>からは決して逃れることができないという、決定的自己認識に至るのである。 <男>の不条理なく<死>を宿命づけられた生の飢餓からの脱出の試みの過程こそ、福永の表す「死の強迫観念」と、それから逃れるための「願望としての生への燃焼」という二面性の切実な発露であり、ここに「深淵」の核心がある。 ロオトリアモンは孤独の中で、ただ自己の逃れることの出来ない、嫌悪に満ちた世界を「見詰め」、その心象風景を『マルドロールの歌』に<幻覚化>して表した。福永は、療養所時代にロオトリアモンの「創作方法」について分析し、それを福永自身の方法にも生かす。その一方でこの<見る>方法が、決して自己の「内的世界」からは、脱却し得ない見方であることを見抜いていたのである。 この課題は、「深淵」に続く「夜の時間」に受け継がれ、渦巻く不安の中での牙牙の極限的自己認識と、そこからの主体的反作用を呼び起こすものとなる。（要約）
3	フランス文学者福永武彦の冒険 —「マチネ・ポエティック」から「死の島」へ	山田兼士	日本文学 51-4 586巻 日本文学協会	2002/04	11	『深淵』の「己」は悪の意識の権化と呼ぶべき存在だが、この人物の造型には明らかにロオトリアモンからの影響が見られる。福永にとってマルドロールとは、まず何よりも世界から、そして自分自身から絶えず逃れようとし続ける「絶望者」のことだ。マルドロールと「己」の間には、「悪」を前提とする強烈な反宗教的感情を身に付けている、という共通項が見出されるだろう。そして、この無神論者は「聖女」のごとき女性への欲望とその達成によって、より深く絶望を認識することになる。 “しかし飢えているお前は美しい。苦しんでいるお前は美しい。己は単純な人間だ。己にはお前が分らない。お前は己の飢だ。” 「飢」とは肉体的なものだけでなく精神的なものでもあることを悟った瞬間である。どれほど素朴なものであるにせよ「己」はこの時すでに一つの思想を手に入れた。福永は、マルドロールをドストエフスキー「悪霊」のスタヴローギンに匹敵する人物として描いているが、福永にとってマルドロールとは、何よりも「悪」の思想の実践者としてあった。人間とはまず「悪」によって存在するものだという認識は、おそらく彼自身の病気体験と戦争体験に根差している。青春期の戦争、27歳で迎えた敗戦、戦後の結核体験などから「死者の眼差し」で生を見詰める習癖を身に付けた福永にとって、「死」とその恐怖から成る「悪」は最も切実な主題だった。 『深淵』の主人公「己」には、生への絶望を前提としなければならなかった福永文学の原点が見出されるのである。（引用）
4	「深淵」について	渡邊啓史	第75回福永武彦研究会 発表資料	2003/03/23	28	「深淵」の題名、人物（呪われた「女」・逃げる「男」・見る「男」）、形式（構図・主題・文体・結末）、構想のそれぞれについて広範な検討を加えている。主要点を以下に記す。 ・題名は、詩集「悪の華」に収められた十四行詩「深淵ヨリ叫ビヌ」（資料5-8）を踏まえていると考えられる。ボードレールにおける、深淵—憂愁—冥府の連想が、そのまま福永に継承され、「深淵」はボードレールの象徴の世界に於いて、その憂愁に満ちた黄昏の薄明の下に読まれなければならない。 ・「深淵」の「女」もまたボードレールの「呪われた女」の一人に他ならず、「女」の「落ちていく悦び」は福永がボードレールから学んだものである。 ・「男」の造型の、逃げる「男」としての面にロオトリアモンの影響が集中的に現われている。マルドロールは「何よりも絶望からの逃走者として」即ち、逃げる男として、定義される。 ・見る「男」としての造型の要点は、「男」の「見るということは所有することだ」という独白に要約される。「男」の眼が画家の眼であると考えることによって、「男」の異様な「美」に憑かれた行動を説明できる。また、「男」には、「風土」の画家、桂との造型上の対応を指摘することができる。 ・独白の形式、鮮烈な視覚的効果など、芥川龍之介の「藪の中」、「地獄変」などを連想させる多くの構図を見出すことができる。「深淵」が芥川に捧げられた密かなオマージュである可能性すら窺わせる。 ・「女」は「男」の手に落ちて逃げられないが、「男」もまた「女」に捉えられ、束縛されて逃げられない。逃げるためには「女」を手を掛ける他はない。この悲劇的な愛の「二重性」こそが、「深淵」の根本的な主題を構成する。そして、この「二重性」は、「意識と無意識の問題」、「破壊本能の問題」に関わっている。 ・「男」の独白に繰返し用いられている話法には、福永が療養所時代に耽読したフォクナー、ヘミングウェイの影響が見られる。